

12日目 新居 -> 白須賀 -> 二川 -> 吉田

12日目は7月31日(土)、新居町駅を7時半にスタート、晴天。

前回見学した新居宿の関所や、旅籠の前を通過して次の白須賀へ急ぐ。3週間前の前回との大きな違いはセミの大合唱、しかも「ワシワシワシ」のクマゼミで騒がしい、うるさい、余計に暑くなる。関西ではクマゼミ、東京ではミンミンゼミが主流だが、南方系のクマゼミが中部地方でも主流となっているのは地球温暖化の影響か。気になってインターネットでクマゼミを調べると確かに分布が北上しているらしい。数年以内に東京もクマゼミで騒がしくなるかも。

更に面白いことが書いてある。

- ・ ミンミンゼミとクマゼミの鳴き声は、実際に人間の耳で聞く限りは全く違って聞こえる。しかし、この2種のセミの鳴き声のベースとなる音はほぼ同じであり、その音をゆっくりと再生すればミンミンゼミの鳴き声に、早く再生すればクマゼミの鳴き声となる。

- ・ セミはカメムシ目、ヨコバイ亜目、セミ科

へえー、あの鼻づまりの鳴き声のミンミンと聞いただけで暑くなるワシワシとは同じ声なのか。

おまけにセミはカメムシと同類か、しかし形は似ていないし臭くない、確かにツマグロヨコバイはサイズは5mm程度しかないもののセミと同じ形、又一つ勉強した。

FM ラジオはクマゼミに負けたのか、受信状態が悪くなり、ミュージックプレーヤーに切り替え、谷村新司の歌声が流れ、その次は女子十二楽坊、我ながらあきれる様な脈絡の無い組合せ。

風炉の井と手筒花火

本日最初の旧跡は新居宿のはずれの「風炉の井」、源頼朝が茶の湯に使ったとある。源平の時代に茶の湯があったのかと疑問を感じつつ石積みの井戸の中を覗いたが、草に覆われ水は見えず、砂利で埋まっている様に見えた。



このあたりは、三河手筒花火の豊橋に近いせいも、多くの民家の玄関に花火の手筒が飾られているのが目につく。玄関の両側に計3本の花火手筒が飾られていたので写真を撮っていたら、その家のおばあさんが現れ、小さいのは孫が作ったと自慢げに教えてくれた。この地では手筒花火は成人男子への通過儀礼の一つになっているのかもしれない。

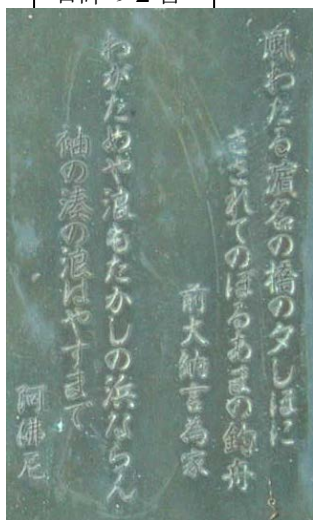
ほうずき畑

旧東海道の松並木を片側だけ残した緩やかな登り道をたどり、出来る限り日陰を伝って歩くものの日差しが強く、汗が流れて目にはいり、日焼け止めクリームなど直ぐに汗で流れてしまう。

1時間程歩いたところに石碑があったので腰掛けて小休憩、汗をふき、水分を補給。

石碑には「風わたる濱名の橋の夕しほに さされてのぼるあまの釣り舟 前大納言為家」「わがためや浪もたかしの浜ならん 袖の湊の浪はやすまで 阿佛尼」の2首があり、12-13世紀の和歌でこのあたりで詠んだものとのこと。和歌・短歌には全く疎いが、叙景よりも叙情の方が共感しやすい。更に歩いていくと道の左側で農家の人が赤いものを刈り取っているのを見て足を止め、覗くと赤く色づいた「ほうずき」、ほうずき畑を見るのは初めて、お盆のお供え用に出荷か。

石碑の2首



ほうずき畑での収穫



白須賀宿 32番目

次の宿場である白須賀に到着、と言っても元白須賀、白須賀は宝永の大地震による津波で宿場が崩壊したため、坂の上に移動し、到着したのは移動前の白須賀なので元白須賀、宿場としての遺跡は残っていないが、一軒の民家は昔の長屋門を残しており見事なので写真、何故重要文化財にならないのか不思議。

元白須賀の長屋門のある民家



元白須賀を過ぎると道は急な上り坂となり、坂の途中に「潮見坂」の説明板、「昔この坂は京から江戸への旅人が初めて太平洋の大海原や富士山を見る景勝地として名高い」とある。あれ、初めて富士山を見つけるのが「見附」ではないのか、と突っ込みを入れたくなるが、これも「おらが国自慢」の一つか。とは言っても、説明板のある場所は坂道の切通しで何も回りの展望はきかず、坂を登り詰めても建物や木々で見晴らしは全く悪い、展望台もあるが名ばかりで、木々と山々の間に遠州灘がほんの少し見えるのみ。その坂の上に「おんやど白須賀」の名の無料休憩所があり一休

み、洗面所で顔や腕を水で洗って体を冷やし、無料の冷たい麦茶を頂いて人心地。この休憩所の説明員の方に白須賀宿の説明を聞き、展示物を見る、本日の一番目の客とか。ガイドブックには当地の名物として、「秀吉も食べた」との館にソテツの実のはいった勝和餅があり、説明員にどこで売っているのか聞いたところ、ただ一人作っていたおばあさんが最近作るのをやめた為どこにも売っていないとのこと、残念。

四猿

坂の上に白須賀宿があるが、本陣や脇本陣、旅籠などは残っておらず、説明版のみ。宿場内の庚申堂は天保12年(1841)に建てられたものだそうで、古い「四」猿がいた、



左から、見ざる、言わざる、右端は聞かざると思うが、右から2番目は一体何のさるだろう。

注: 上記の様に、白須賀宿の四猿の四番目が何なのか分からないと書きましたが、その後に拙文の愛読者のM氏から教えて頂きました。

孔子の論語の「礼にあらざるもの視るなかれ、聴くなかれ、言うなかれ、行うことなかれ (=せざる)」があり四匹目はその「せざる」の様です。

三猿はアジアだけでなく世界中にあり、欧米では "三賢猿"(the three wise monkeys) と呼ばれるそうで、猿だったり人間だったりするそうです。

色々教えて頂いて、又、勉強になりました。Mさん、有難うございました。

火防(火よけ)の槇



遺跡として残っているものの一つに「火よけ」があり、火災時の類焼を防ぐ為に、常緑樹で火に強い槇を10本ほど植えたものが6箇所にあったとのこと、槇とは思えない程大きな槇となって残っている。

又、この白須賀の有名人として江戸時代の国学者の夏目鸕鷹、加納諸平の石碑があったが、全く記憶に無い名前だったのでパス、不勉強でスミマセン。

曲尺手

道が直角に折れ曲がり、見通しの悪いところに曲尺手(かねんて、と読む)との面白い言葉の説明板があった。

「曲尺手は直角に曲げられた道のことで、軍事的な役割を持つほか、大名行列同士が道中かちあわない様にする役目を持っていた。格式の違う大名がすれ違う時、格式の低い大名は駕籠からおりて挨拶するのがしきたりだった。

しかし、主君を駕籠から降ろすのは行列を指揮する共頭(ともがしら)の失態となるので、斥候を曲尺手の先にだし、行列がかち合いそうな場合は休憩を装って最寄のお寺に緊急避難をした。」
狭い籠の中で1日中座っているのは結構きついものだったらしいが、お供の方も大変だったらしい。白須賀宿を後にして、次の二川宿へ向かう。

静岡から愛知へ

旧東海道は国道173号線から1号線となり、道路標識は愛知県豊橋市、やっと静岡県を出て愛知県に入ったことを知る。静岡県は53宿中の21宿を占め、つまり東海道宿場の39%は静岡で、江戸時代の国名では駿河と遠江の2国、このウォーキングでは、6日目の三島から12日目が静岡となる。静岡は大きい、広い。

太陽は殆ど真上となり、日を遮る大きな建物も木も何もない郊外の自動車道、ガードレールの外側の歩道を6Kmほど、5分おきにペットボトルのアクエリアスを飲み、途中のコンビニでソフトクリームを買って舐めながら歩く、他に歩いている酔狂な人はいない。

遙か遠くに見えていた新幹線に近づき、やがて道は線路と平行、道路沿いに風力発電を10基程設置した工場がある。風力発電装置を販売している会社で、設置されている風力発電装置は新幹線乗客への宣伝用に見える。この風力発電は、プロペラ型ではなく円筒形のもので珍しい。

その工場の社名は「シンフォニアテクノロジー(株)」とあり、聞きなれない社名なのでインターネットで調べたところ、旧神鋼電機で2009年に社名変更とのこと、退職して4年、去るものは日々に疎し。

風力発電のある工場



二川宿 33番目

国道1号線と別れ、新幹線のガードをくぐり、10分ほど歩くと道は狭くなり、二川(ふたがわ)宿に到着。江戸時代ではこの二川宿から三河となる。二川には宿場としての遺跡が沢山残っている。まず、本陣資料館へ入館、入館料は400円也。東海道の本陣で残っているのは2つでその一つは二川。その本陣に隣接して旅籠もある。本陣の建物の中にはいると、普通は顔を見せる説明員が一人もいない。

12時を少し過ぎており、立ち入り厳禁の扉の向こう側での話し声は、多分、説明員の昼食時の雑談。本陣の構造そのものは、江戸時代に旅慣れてきたので、説明員がいなくとも、風呂、台所、トイレの位置など大体分かるようになってきているので、一人で見て回る。縞の合羽や三度笠、男女、子供用の着物を置いた部屋があり、「使用後は元に戻してください」との張り紙があることからすると、写真撮影の為の着物らしい。この着物を掛けておく衣桁(いこう)、子供の頃家にもあったが、最近はお目にかかれないものの一つ。又、殿様様の部屋もあり、これも全く他と同じ構造で一段と高くなった畳と脇息があり、床の間に面白い形の時計が置かれていた。

殿様よりも供頭の方が時計を必要としたらうに。

本陣の玄関



大名の部屋、床の間に時計が置かれている



本陣の隣にある旅籠には、旅人が到着して女中さんが足を洗う為の水を入れた盥を運んできた時の人形が置いてある。時代小説では、旅籠に限らず、普通の家でも帰宅時には、盥を準備して足を洗う様子が書かれているが、現代で云えば靴を脱いで家にはいる日本人の文化はいつ頃からそうなったのだろうか。

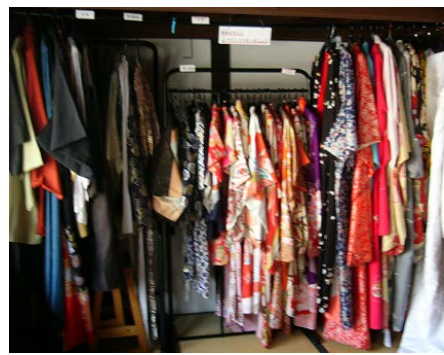
旅籠の入り口、足を洗う



縞の合羽



写真撮影用の着物



木目調の側溝の蓋



消防車のガレージの絵



この二川には、旧家も多く、通りに面した普通の家にも「二川宿」のポスターが張られ、全体とし宿場町の雰囲気を作られているが、面白かったのは本陣の前の側溝のコンクリートの蓋が木目調に塗装されていたこと、関西風に言えば「凝ってはる」。

凝っているものと云えばもう一つ、二川の消防車のガレージのシャッターの絵が面白い。

時刻は既に 12 時を過ぎ、レストランか食堂を探すもなかなか見つからず、やっと見つけたのはラーメン店とインド料理店。夫婦らしきインド人二人のいる料理店に入り、サリーを着て額に印をつけた女性にカレーを注文(本当は覚えられない難しい名前の付いたカレー)、皿からはみだした 40cm ほどもある大きなナンは注文後に焼いたもので、カレーもナンも美味しかった、880 円也。

吉田宿 34 番目

昼食後に次の吉田宿に向けてスタート、距離は 6Km、吉田宿は現在の豊橋、旧東海道は二川を出て火打坂を越え、豊橋の市街地へと下ってゆく。国道 1 号線としばらく平行したあとに一緒になり、交通量も増え、行き交う人も多い。

日差しはますます強くなり、日陰は少なく、5 分おきにペットボトルのアクエリアスを飲みながら黙々と歩く、暑い。アクエリアスも 3 本目となると口の中に甘さが残り、飲みづらくなってくる。喫茶店でもあれば冷たいものを飲んで休憩しようと考えたが、探す時に限って見当たらない。豊橋の中心部に差し掛かると、懐かしや路面電車が走っている。いわゆるチンチン電車も走っていたが、新しい、とても路面電車とは思えない格好良い車体もある。



豊橋の新しい車体の路面電車



吉田城の鉄櫓

かき氷

やっと見つけた喫茶店には、「氷」ののぼり、店にはいって思わず「かき氷」、かき氷専用のメニューを出され、暫く悩み、名前が美味しそうな宇治金時を注文。考えてみたら、店にかき氷を食べるなんて何十年ぶりか。かき氷が出来るまでに氷水を 2 杯飲み、出されたかき氷を一心不乱に食べ、2/3 ほど食べると口が冷たくなり、顔がこわばってくる。体の熱気は少し冷めたので食べるペースを落とし、落ち着いて小豆を味わいながら食べる。宇治金時 600 円也。

吉田城

豊橋の中央部を旧東海道が走り、吉田宿は市の真ん中、ここにも道に曲尺手(かねて)、遺跡は殆ど残っておらず説明板のみ。そこで吉田城へ寄り道。城は公園となっていて、建物としては復元された「鉄櫓(くろがねやぐら)」があるのみ。その鉄櫓の横の展望台から見ると、豊川が大きく蛇行し、その蛇行の水深のあるところを城の後背として守りを考えた立地となっているのがわかる。

豊橋の消火栓の蓋



豊橋

城を出て、旧東海道へ戻る。豊橋は手筒花火の街らしく、道路の消火栓の蓋にも手筒花火が描かれている。

市内を流れる豊川にかかる橋の名前が豊橋で、東海道3大橋の一つとのこと、因みに他の二つは瀬田の唐橋と矢作橋、その豊橋が現在の豊橋市の地名の由来。何の変哲もない鉄とコンクリートの現代の豊橋を渡り、一路西下、JR飯田線下地駅に4時半に到着。

豊橋



12日目は5万歩で約30Km、暑いときは休み休み歩くので距離は伸びず、腕や顔はかなり焼けて黒くなった。本日の飲んだペットボトル4本は最高記録。

今回も東京駅八重洲口を深夜12時に出る夜行バスに乗り、朝の6時半に浜松着、7時半に新居町駅からスタート、帰りは下地駅からJRで豊橋、新幹線で浜松、浜松から午後6時発の高速バスに乗り東京に午後10時半帰着。

次回は 吉田 -> 御油 -> 赤坂 -> 藤川 -> 知立

12日目

